

美術科
より

国語科との連携

美術科では、絵画や彫刻などの美術作品を鑑賞し、感じ取ったことや考えたことを話し合ったり、鑑賞文を書いたりする授業が行われています。また、国語科でも美術に関する評論の文章を読んだり、鑑賞文を書いたりする授業が行われています。

二つの教科で美術作品の鑑賞に関する授業があるのですが、国語科と美術科の関係をとどのように捉えればよいのでしょうか。

美術科では「表現」と「鑑賞」の学習があります。また、「表現」の学習と同様に「鑑賞」の学習も主体的で創造的な学習と位置づけられています。感じ取ったことや考えたことをもとに、絵や彫刻などを創り出すのが「表現」の学習であり、作品との対話を重ね、思いを巡らしながら自分の中に新しい価値や見方を創り出すのが「鑑賞」の学習なのです。

したがって、美術科における鑑賞の学習では、「自分はどうのように見るか」ということが大切になります。

自分の中に作品に対する価値を明確にも

つこと、そのような意識を価値意識と呼び、自分の価値意識をもって批評し合う学習を通して見方や感じ方を広げ、美術を愛好する心情を育てることや感性を豊かにすること、美術文化についての理解を深めることなどを美術科では目ざしているのです。

さて、批評し合う鑑賞の学習では、思いや考えを言語化する必要があります。言葉にすることによって漠然と見ていたことが整理され、思いや考えの根拠が明確になるのです。また、話し合いを通して他者の感じ方や考え方を知ることができ、見方の多様性に気づくとともに、自分の見方をより深めることができるのです。

価値意識を高めるために欠かせない言語活動は、具体的な根拠を述べたり、文章の組み立てを考えて書いたりすることなど、国語科の学習によってその質を高めることが期待できます。

また、美術科の学習によって生徒は価値意識をもって鑑賞することを学び、それは国語科での鑑賞文の学習に反映されること

になるでしょう。

このように相互に関連し合う学習であるため、授業実践においては国語科と美術科の密接な連携が必要であり、効果的だといえるでしょう。

美術作品を鑑賞するという行為に対して、二つの教科がそれぞれの教科特性から授業アプローチする。それが縫^より合されるところに、生徒たちの主体的な文化体験が生まれてくるのではないのでしょうか。



うえの こういち
上野行一

大阪府生まれ。帝京科学大学こども学部教授。対話による意味生成的な美術鑑賞教育の開発を研究テーマにしている。美術による学び研究会会長。NHK教育テレビ番組委員高校講座「美術」監修。著書に「私の中の自由な美術」（光村図書）など。光村図書中学校「美術」教科書著作者。

特集

鑑賞文を書こう